Title	子供の発達と話し言葉の変化
Author(s)	仲, 真紀子
Citation	日本語学, 17(11), 178-187
Issue Date	1998-09
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/44822
Туре	article
Note	複雑化社会のコミュニケーション. 対人関係の変化
File Information	NG17-11_178-187.pdf





子供の発達と話し言葉の変化

仲

<二歳三か月児と母親の対話。子供、酢味噌ののった ふろふき大根を指してど

母:これねえ、おみそ。そいでねえ、 子:これなあにー?

子:これねえ、おみそう?

·:これねえ、大根なの、お大根、お大根の上にね

え、かけるのう。

< 六歳九か月児と母親の対話。子供、食卓に用意され

たものを見て 子・これなに?

母・さば(小さい声で、早口で)

子:なに? 母:さば (少し大きい声で、早口で)

母・さばっ 子・なに?

(大きな声で、早口で)

子:さばってなに?

母:さかなっ! (「分かったか」と言わんばかりに)

| 1 子供の発達とコミュニケーションの変化

等に対話できるようになってゆく様は見事である。人の ん坊が、みるみるうちに語彙や文法を獲得し、大人と対 表情や泣くことでしかコミュニケーションできない赤 複雑化社会のプロション

は外から供給される。その供給源は、主に養育者(多くることが知られているが、一方で、素材となる文や単語言語獲得には内的、生物学的メカニズムがかかわってい

の場合母親)である。

私は幼児が対話の中で、どのように語彙を獲得するか を研究している。冒頭の例は、食事場面で縦断的に収録 を研究している。テープだけを聞くと、二歳児の相手を している母親と六歳児の相手をしている母親は、同一人 いなどが異なり、前者は優しく丁寧な母、後者は疲れて いなどが異なり、前者は優しく丁寧な母、後者は疲れて にしい母というようにも見える。だが実は両方とも私で ある。自分としては何も変わったつもりはないのに、ず ある。自分としては何も変わったつもりはないのに、ず ある。自分としては何も変わったつもりはないのに、ず

絵本を読み聞かせる場面を分析し、母親は子供の注意を大人の対話的特徴も変化する。上で見たように、幼児にこれた文型が使われるなどの形式的特徴も見られるは単純で、文法にかない、反復やパラフレーズが多く、た単純で、文法にかない、反復やパラフレーズが多く、た単純で、文法にかない、反復やパラフレーズが多く、は、大人の対話的特徴も変化する。上で見たように、幼児に対してゆくが、相手をするが、別の言語能力は日々、変化してゆくが、相手をする

能動的な役割を子供に求めるようになるという結果を見場面を分析し、子供の年齢が高くなるほど、母親はより六)や村瀬他(一九九八)は日本人母子における絵本読みに応じて変化することを示した。同様に、石崎(一九九ンをリードすること、しかもこのパタンは子供のレベルー

話のパタンを子供のレベルに調整し、発達に応じて足場を示している。母親の話し方の変化は、語彙や文法、会語使用が子供の育児語使用に先行して減少してゆく様子出している。また小椋他(一九九七)は「わんわん」や能動的な役割を子供に求めるようになるという結果を見

でも、細長ければ「本」、平たければ「枚」というようでも、細長ければ「匹」、大きければ「頭」、同じクッキーなり、いわば目に見えない助数詞カテゴリーは、同じ犬ともに用いる接辞――である。なぜ助数詞か。助数詞はなり、いわば目に見えない助数詞カテゴリーに対して用なり、いわば目に見えない助数詞カテゴリーに対して用なり、いわば目に見えない助数詞カテゴリーは、同じ犬でも小さければ「匹」、大きければ「枚」というようだ。

子供の発達と話し言葉の変化

|喚起し、質問し、命名し、確認を与えるなど一定のパタ

脈に頼ったり、視界にあるものを指して「これは『匹』に、分類学的なカテゴリーとは必ずしも一致しない。文

対人関係の変化

料だと言うことができる による言語的な入力の役割を調べるのにうってつけの材 よ」などと教えることができないので、 助数詞の獲得には六~一〇年もの年月がかかると言わ 助数詞は、 母親

くは仲——九九六、Naka, in pressを参照のこと)。 二~四歳児の母親の発話を見てゆくことにしたい(詳し) ような言語的入力を受けるのか、ここでは年齢を下げ、 うに長くかかる助数詞獲得の最初の段階で、幼児はどの られること、自覚的にルールを作ってゆけるようになる べ、五歳でもダチョウを「頭」と数えるなどの誤りが見 一六歳児を対象に生物や事物の助数詞の獲得過程を調 田・今井―一九九六)。例えば内田・今井(一九九六)は四 のは六歳になってからであることを示している。このよ しらる (Carpenter-1991、Gandou-1984、Matsumoto-1985、

らだ。ただし資料を収集しているときには、これを助数 詞の分析のために用いようとは考えていなかった

間、 二一回の会話は主に母親と女児双子によるものであり ころ一九四四一発話(476kbyte)が得られた。なお、この 各回の録音時間はおよそ四五分。資料を書き起こしたと 分析を行ったのは二歳○か月から二歳一一か月の一年 会話はおよそ週一回、一歳から四歳まで収録したが、 一月あたり二回ずつの、計二一週分の資料である。

類、 簡略化のため、二人の幼児の資料はまとめて提示する。 った。以下の分析は、この一九六発話に基づいている。 父親が食事に加わったのは二回だけであった。 書き起こした会話で用いられた助数詞は全部で二一種 助数詞を含む発話は一九四四一発話中一九六発話だ

2 母子対話の縦断的事例研究 |歳児と母親の対話における助数詞の使用

双子の食卓場面の会話である。食卓場面を選んだのは、 比較的独立した形で記録できるのではないかと考えたか 物理的環境や心理的状態の変動が少なく、 ここで紹介する資料は、 冒頭の資料と同じ、 会話の発達を 私と女児

[1] 助数詞の種類と頻度

助数詞の大半は母親―父親間で用いられていた。 食卓を共にしたのはわずか二回であったが、二一種類の る使用頻度、後者が子供による使用頻度である。 に添えられた () 内の二つの数字は、前者が母親によ 間 幼児に対して用いた助数詞は七種類であり、 | 一| 種類の助数詞の使用状況を**表1**に示す。 で頻繁に用いられた助数詞は、「回」、「個」、「つ」の しかも母子 各助数詞 母親が

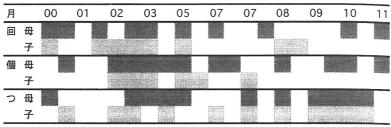


表 1 助数詞の種類と頻度

誰が用いるか	助数詞
母←→父	杯、本、週間、日、時間、分、秒、円、万、千、百、ミリ、ケース
母←→子(少)	人 (17,3)、口 (10,1)、歳 (4,5)、キロ(1,1)
母←→子(多)	回 (21,27)、個 (24,14)、つ (17,16)
子供間	番 (0,2)

内の2つの数字はそれぞれ母親と幼児が使用した頻度を示している。

助数詞使用の同期性



注:個々のセッションにおける濃い網がけは母親の使用、薄い網がけは子供の使用

以上、

母親は子供に限られた種類の助数詞

よく用いられる助数詞が移行している。

母子ともに「回」から「個」、「つ」へと、

多くの母子対話を縦断的に検討することに 変化させているのだろう。 しょう」などの能動的な働きかけは見られな 詳細に調べても、「かぼちゃは一個と数えま で対応が見られることが示唆された。 を用いていること、またその使用には母子間 般化できるかどうか、 用いる語彙に合わせて自らの助数詞使用を 母親は恐らく意識的することなく、 次の調査では、 このような現象が

子供

0

詞の使用には母子間で有意な同期性があり、 なっている。 している。母が用いたセッションは 濃い網が をどのセッション(食事場面)で用いたかを示 表2は母親と子供が各々「回」、「個」、「つ」 子供が用いたセッションは薄い網がけに 助数詞使用の推移と母子の対応 セッション単位で見ると、

三種類だけであった。

た。

―二、三、四歳児と母親の対話に3 母子対話の横断研究

に大学の研究室に来てもらい、数の理解の調査というカぞれ一七組、一六組、一八組に参加してもらった。母子この調査では、二、三、四歳の幼児とその母親、それ

う一方の側に実験者と補助者が座った。調査は三つの段でいる。机の一方の側に母親と子供に座ってもらい、も(「杯」が期待される)の七種類の事物が各々四個ずつ並んれる)、山型クッキーとアメ(「個」が期待される)、カップることが期待される)、平たいクッキーと皿(「枚」が期待さ

には大きな机があり、ポッキーとスプーン(「本」で数え

ー・ストーリーのもとで調査に参加してもらう。

部屋

この段階で、母親が子供に対しどのような助数詞を用いの事物が描かれており、全部で七枚の図版が用意された。にとってもらってください」と教示する。一枚に一種類示し、「図版に描かれている物をその数だけ、お子さん示し、「図版に描かれている物をその数だけ、お子さん離から成っている。

るかを調べる。二歳児と母親の例を示そう。

母:うん。 子:もうひとつ。 ー。まーるいの、ふたーつ。もうひとつ。

数えるときにどのような助数詞を用いるか調べる。のを数えてもらってください」と教示し、子供が事物を進む。母親に「今度はお子さんに、今取ってもらったも

幼児が七種類の事物を全部取り終えたら、次の段階に

母:じゃあね、クッキー。いくつあるかな。

母:ふたつね。これはピンポーン。子:クッキー、ふたつ。

調査の意図を明かし、家庭での助数詞使用状況などをアためであったが、ここでは触れないことにする。その後、が大人に対してはどのような助数詞を用いるか、調べるを大人(補助者)に対して行ってもらった。これは母親最後に、母親に、第一段階で子供に対して行った課題最後に、母親に、第一段階で子供に対して行った課題

ンケートで答えてもらった。

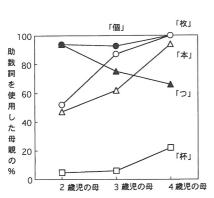
こした。生起した助数詞を分類しカウントしたところ、

会話はすべてテープレコーダーで録音し、

後で書き起

クッキ

母:まーるいクッキーをふたつもってきて。



100 各 助数詞 80 を使用し 60 40 「本」 た幼児の 20 「枚」 「杯」 4 歳児 3 歳児

も見られた。

現や「○ちゃんの分と△ちゃんの分」というような表現

表

加

図 1 子に対する、母親の助数詞使用

図 2 子の助数詞使用

[1]

用いられた助数詞の種類

杯」の使用者率

七種類の事物を込みにしたときの、「個、つ、枚、本、

(助数詞を使用した者の割合)を図1、

に示す。図1は母親、図2は幼児である。

幼児の年齢が

ろう。 場合とは異なり、 幼児の年齢に応じて制限の度合を変化させると言えるだ また、幼児の年齢が上がるにつれ、母親は「枚」や「本」 低いほど、 [2] になる。母親は幼児に対し限られた種類の助数詞を用い、 など、特殊な(特定の形態に固有な)助数詞を用いるよう の減少は四歳よりも後になるのかもしれない。 本」の使用が上昇する。だが「個」と「つ」は母親の 助数詞の使用頻度 幼児も母親同様、年齢が上がるにつれ「枚」と 母親が「個」や「つ」を使用する率は高い。 減少することはなかった。「個」、「つ」

た頻度は少ないが、「いーち、にーい」など数だけの えて平たいクッキーと皿では 七種類の事物すべてに「個」、「つ」の使用が見られ、 ンでは「本」、コップの水では「杯」が用いられた。 枚、 ポッキーとスプー

対人関係の変化

を示そう。 は、二歳児の母親が三、四歳児の母親よりも、同じ助数 でさほど変わらないが、頻度は二歳児で特に高い。これ 詞を何度も繰り返し用いていることを反映している。例 類と頻度を示している。助数詞の種類は二、三、 図3は、 母親がひとつの事物当たり使用した助数詞の 四歳

二歳児の母:今度はビスケットどこにあるかな。ビ るいの。ふたつちょうだい。はい、ありがとう。 をふたつちょうだい。大きいのがいいな、まー ふたーつちょうだい、ビスケット。ビスケット スケットふたつください。ビスケットふたーつ。

四歳児の母:じゃあね、たいらなビスケットを一枚。

(「つ」を五回使用。)

(|枚」を一回使用。)

[3] 母親によるフィードバック

場合、母親が助数詞を付けてフィードバックを返すこと あった。また、子供が助数詞を用いずに、数だけ述べた る助数詞を用いて、母親がフィードバックを返すことが があった。このようなフィードバックは、以下のように 分類された。 子供が事物を数えた際、子供が用いた助数詞とは異な

> (a)子供が「三」など、数だけを述べたとき、 「三個ね」、「三つね」など、一般的な助数詞を用 てフィードバックを与える。 母親が

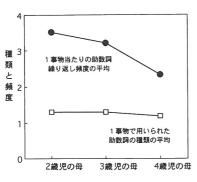
(b)子供が「三」など、数だけを述べたとき、母親が 「三本ね」、「三枚ね」など、特殊な助数詞を用いて フィードバックを与える。

ⓒ子供が「三個」、「三つ」など、一般的な助数詞を用 助数詞を用いてフィードバックを与える。 いた時、母親が「三本ね」、「三枚ね」など、特殊な

団子供が不適切な特殊な助数詞(スプーンに対する「枚」、 平たいクッキーに対する「本」など)を用いた時、母親 が適切な助数詞を用いてフィードバックを与える。

詞の使用を精緻化する方向でフィードバックを変化させ じて、一般的な助数詞からより特殊な助数詞へと、 児の母親で多い。母親は子供の助数詞使用のレベルに応 のように特殊な助数詞を含むフィードバックは三、 ードバックは相対的に二、三歳児の母親で多く、ⓒやゆ ように「数」を「数+一般的助数詞」に置き替えるフィ 各フィードバックの生起頻度を図4に示す。(aやb)の

数詞の種類を制限し、子供の年齢に応じて制限の度合を 以上、縦断研究と同様、母親は幼児に対して用いる助 ていると言えよう。



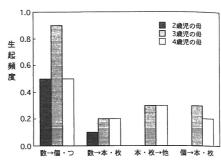


図 3 用いられた助数詞の種類と頻度

母親によるフィードバック 図 4

類、

たフィードバックを行う。

母親は精密な助数詞教

せ 種

がある 留学生が三人(X、Y、Z)である。A、B各々がX、Y、 のが目的だった。被験者は日本人学生が二人(A、B)、 留学生) に優位に立つ者(日本語の場合は日本人学生、英語の場合は らう。得意な言語、不得意な言語で話した場合、 本語および英語(留学生の母国語)で簡単な会話をしても のレベルに応じた情報を引き出すのだろうか。 私はかつて安田とともに次のような調査を行ったこと (Naka and Yasuda-1995)。留学生と日本人学生に日 がどのようなフィードバックを行うのか調べる 言語的

プログラムが、完成した言語使用者である母親から自分 しているのだろうか。それとも子供の中にある語彙獲得 グラムを持っていて、子供の様子を見ながらそれを実行

人間関係の発達とことばの変化

母親は幼児の月齢や年齢に応じて、用いる助数詞の 頻度を変化させる。また幼児の助数詞使用に合わ

向でフィードバックを行っていることなどが示された。 ているらしいこと、 変化させること、助数詞使用の変化は母親の方が先行し 母親は助数詞の使用を精緻化する方

一日本で安く暮らすには」、"Why

Z各々とペアになり、

カテゴリー	内容	例
開始	新しいトピックの 開始	日:え、じゃあまず一つめ、どういうときに物価が高いって感じますか?
拡張	相手の発話の拡張	(留:あの、食事をするとか、それをすごく高いと思います。) 日:う-ん、じゃ、時々そういう食事とかもしたりするんですか、高い。
説明	語句、状況の説明	(日:お金の管理というか、そいうのはどういうふうにしてます?)(留:ん? もう一度。)日:あの、お金、物価が高いですよね。だから使う工夫っていうか、使い方っていうか。
言い換え	相手の言ったこと の言い換え	(留:あの、だいたい budget 英語で budget ていうけど、日本語ではわかんない。)日:予算、予算かな。
繰り返し	相手の言ったこと の繰り返し	(留:そいういう店には行かない。) 日:行かないんだ。
質問+	新しい情報を問う	日:貯金とかしてます?
質問-	明確化の要求	(日:お金の管理というか、そいうのはどういうふうにしてます?) 留:ん? もう一度。
答え+	拡張された答え	(日:え、じゃあまず一つめ、どういうときに物価が高いって感じますか?) 留:う-ん、お金、お金がだんだん少なくなると、やっぱり物価が高いと 思います。
答えー	「はい、いいえ」 の応答	(日:う-ん、じゃ時々、そういう、食事とかもしたりするんですか、高い。) 留:うん、はい。
反応	内容を伴わない 応答	(日:あの、お金、物価が高いですよね。だから使う工夫っていうか、使い方っていうか) 留:あー。

注:日は日本人学生、留は留学生の発話を示している。

に与え会う言語情報が、話し手のどるのかもしれない。話者同士が互い然的に生じる話し方の変化と、個人然的に生じる話し方の変化と、個人然のである。

参加者の発話を表3をもとに分類したところ、日本語でも英語でも、日本ところ、日本語でも英語でも、りし、話者間のギャップを補っていた。優位に立つ日本人学生は新しいた。優位に立つ日本人学生は新しいた。優位に立つ日本人学生は新しいた。優位に立つ日本人学生は新しいた。優位に立つ日本人と留学生では方を行うなど、日本人と留学生では方を行うなど、日本人と留学生では方を行うなど、日本人と留学生では方にせよ、自分が優位に立つ場合とで、話し方は異なっうでない場合とで、話し方は異なっ

English?"などのトピックで五分ほど

の会話をした。

は大変面白い問題だと思う。の「話し方」やその変化を規定するのだとしたら、これちらかにだけ帰属するのではない、ダイナミクスとして

引用文献

Carpenter, K. (1991) Later than sooner: extralinguistic categories in the acquisition of Thai classifiers. Journal of Child Language, 18, 93-113. Gandour, J., Petty, S. H., Dardarananda, R., Dechongkit, S., & Mukngoen.

S. (1984). The acquisition of numeral classifiers in Thai.Linguistics, 22.

455-479.

Matsumoto, Y. (1985) Acquisition of some Japanese numerical classifiers: the search for convention. In Papers and reports on child language development. The Board of Trustees of the Leland Stanford Junior University. pp. 79-86.

Naka, M.in press The acquisition of Japanese numerical classifiers by twoto four-year old children: the role of caretakers' linguistic inputs. Japanese Psychological Research.

Naka, M., & Yasuda, H.(1995) Asymmetrical conversation between a Japanese native speaker and a foreigner. The Bulletin of The Faculty of Education, Chiba University, 43 (1), 1-6.

中真紀子(一九九六)「対話における語彙獲得—助数詞の獲得に関 中真紀子(一九九六)「対話における語彙獲得—助数詞の獲得に関

岩立志津夫(一九八八)「言語獲得」(原野広太郎・小嶋秀夫・宮本手)

美沙子・無藤隆・高橋恵子・湯川良三(日本児童研究所)編『児

子供の言語発達、認知発達」(『神戸大学発達科学部研究紀要』 五小椋たみ子・吉本祥江・坪田みのり(一八八七)「母親の育児語と童心理学の進歩 1988年版』、金子書房、七五~九五頁)

村瀬俊樹・マユーあき・小椋たみ子・山下由紀恵・ Dale, P. S.(一九巻一号、一〜一四頁)

岡本夏木(一九八二)『子供とことば』(岩波新書) 鎖の分析」(『発達心理学研究』九巻二号、一四二~一五四頁) 九八)「絵本場面における母子会話:ラベリングに関する発話連

Sanches, M (1977) Language acquisition and language change: Japanese numeral classifiers.In B. G. Blount., M. Sanches, M., & J. J. Gumperz

(Eds). Sociocultural dimensions of language change. New York: Academic Press. pp. 51-62.

究』四四巻二号、一~一○頁)過程―生物カテゴリーと助数詞ルールの獲得―」(『教育心理学研内田伸子・今井むつみ(一九九六)「幼児期における助数詞の獲得

補助を受けた。 重点領域研究(一)05206103、06205103、07202103、08202102の重点領域研究(一)05206103、06205103、07202103、08202102の

(なか・まきこ 千葉大学助教授)

子供の発達と話し言葉の変化

石崎理恵(一九九六)「絵本場面における母親と子供の対話分析:

フォーマットの獲得と個人差」(『発達心理学研究』七、一~一一